「命を守る」人になる

越喜来中学校　一年　地舘　凪海

夏休みに入ってすぐの七月二十六日早朝、障害者施設で殺人事件が起こり、十九名の方がなくなるというニュースが流れました。私はその時、殺害した容疑者が許せなく、とても腹が立ちました。なんの罪もない、まして辛い状況でも精一杯がんばって生きている人たちを軽々しい気持ちで殺してしまうなんて人として許せないことだと思いました。

私の父は東日本大震災の津波で亡くなりました。最初はずっと、忙しくて帰れないのだと思っていました。だけど、三日たっても四日たってもずっと帰って来ません。探しにいこうと思いましたが、車のガソリンが少ないので待つことしかできませんでした。支援物資などを分けてもらったり、どうしても必要なものはコンビニに歩いて行ったり、知り合いの方に車に乗せてもらったりして買い物に行けたので、生活の方は何とかなりました。それと

同時に、助けてくれる方々の優しさと生きる大切さを強く感じただけに、なおのこと、早く父に会いたいという気持ちが強くなっていきました。

ようやくガソリンを入れることができて、遺体が安置されている場所を何カ所も回りました。DNAを採取されるという経験も、初めてのことでした。

小学一年生のことだったので、記憶はあいまいですが、写真を見てハンカチを持って、声を詰まらせながら泣いている家族の方々も何人も見ました。その人の持っている写真には汚れている服が写っているだけでした。当時の私には、どうしてそんな写真を見て泣いてしまうのか、不思議で仕方がありませんでした。

少しずつ生活が落ちついてきて震災から二年が立とうという頃に、母の元に一本の電話が届きました。

「お父さんのような人が見つかったかも」。

電話を切った母は、あせったように私に言いました。実はこういう電話は何回もありました。その間に父の身も発見されました。父ではないかという遺体も三回ほど見に行っていました。だけど、どれも父ではなかったので今回も違うのではないかと思っていました。

発見された遺体が安置されている部屋には母だけが入り、私は叔母達と待合室で待っていました。どのくらい待ったでしょうか。待合室に戻ってきた母の姿を見て、一瞬、思ったことがあります。

「以前に会った、服の写真をみて泣いていた人と同じだ」。

これが私の正直な気持ちでした。

「父さんだ、たよ。見つかって良かった」。

母はそう言いながら泣きじゃくっていました。同時に、に、こりと笑っていました。その時初めて私は、写真を見て泣いていた人の気持ちが分かりました。母の姿から分かったこともあります。でも、それ以上に、自分が

同じ気持ちになっていることが分かったからです。悲しい気持ちもあります。悔しい気持ちもあります。でも、同時にようやく帰って来てくれたことにうれしい気持ちも混じっていて、その気持ちが合わさって攻めてくるのをぐっとこらえている自分がいました。

それと同時に、命というものがどんなに大切な物か、そしてはかないものか、だからこそ、生きている今がどんなに大事なのかが分かりました。たった一つの命失われることでたくさんの人が悲しみます。自分の持っている命を大事にしよう、大切に守ろうと決めました。

だけど、そんな大切な命を粗末に扱う人間にいることに信じられないという驚きと怒りが沸いています。

私はまだし、かりとした「命」ということは分かりません。それは生きていき、いろいろと経験していくにつれて分かっていくものではないかと考えています。だから私は将来

「人の命を守る」という仕事につきたいと思っています。そして、働きながら命の大切さと尊さを年月を経て分かっていきたいです。

「人の命を守る」ということはとても責任が必要だと、良く聞きます。実際、命の重大さは自分なりに感じているつもりで、心配なこともたくさんあります。でも、たくさん学んで、立派な「人を守れる人」という立場になりたいです。

私たちはそんなとても大切な命を自分から投げ出したり、他人に奪われたりするのは絶対にいけないことだと思います。それなのに毎日のように命にまつわる悲しいニュースが流れています。私たちはもう一度、「命」というとても重要なものについて深く考えていかなければならないと考えています。